

301

10

傳藤原行成書

# 升色紙

並五首一紙

釋文

全

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

# 始





傳藤原行成筆 升色紙 解題並釋文

解題

升色紙はその形が矩形で、升の形に類してゐるので、斯く名付けられた。料紙は鳥の子の白紙、雲紙、薄藍紙等に細き雲母を撒いたものを用してをり、鳥の子の白紙が最も多い。

内容は清原深養父の歌集で、大体は一葉に一首を原則としてゐるが、中には一首半又は二首書いたものがあり、これによつて見れば、もとは一つの帖であつたらしいが、今は断片となつて散逸し、諸家に分藏されてゐる。これは道風の繼色紙と軌を一にするものである。従つて、現在世に何葉存在するかは明らかでなく、十七葉あるとの説が行はれてゐるが、信をおき難い。

歌の初めの斜線や、古後拾等の文字、及び脱字挿入等は、藤原定家が、校



閱の際書き入れたものとされてゐる。

筆者は藤原行成と傳へられてゐるが、もとより確證はない。書風の優難典麗なることは、各字宛轉線繞、鳳舞ひ蛇驚くの趣ありて、氣品高邁、情趣横溢せり。とする尾上八郎氏の言によつても裏書される。その布置濃淡の奔放さ、その散らしの自由さは、凡て古筆中色紙と稱されるもの、中では、貫之の寸松菴色紙、道風の繼色紙と共にその三絶ともいふべき傑作である。

これと同一系統に入るべき書蹟を求むれば、關戸本古今集、和泉式部集切、針切、曼殊院古今集等が數へられる。

然しこれとても、何れも行成筆といふ確證は得られないのである。

釋 文

者<sup>は</sup>るゆ支<sup>き</sup>のふる悲<sup>ひ</sup>

可<sup>か</sup>支<sup>き</sup>くも利<sup>り</sup>ふゆ耳<sup>みみ</sup>お

くれて布<sup>ぬ</sup>るゆ支<sup>き</sup>の

者<sup>は</sup>るとも

身<sup>み</sup>えて今日<sup>けふ</sup>くらし

徒<sup>つ</sup>ゝ

うち者<sup>は</sup>へて者<sup>は</sup>るは

さはかりのとけ支<sup>き</sup>を

花<sup>はな</sup>農<sup>の</sup>古<sup>こ</sup>ゝ路<sup>みち</sup>や那<sup>な</sup>二

い所<sup>ところ</sup>くらん

三月つこもり可<sup>た</sup>多<sup>た</sup>よ  
利<sup>り</sup>や万<sup>ま</sup>みつよ利<sup>り</sup>者<sup>な</sup>那<sup>な</sup>農<sup>の</sup>  
な可<sup>か</sup>れいつるを三<sup>み</sup>て  
者<sup>な</sup>那<sup>な</sup>ちれる水<sup>の</sup>万<sup>ま</sup>耳<sup>に</sup>く<sup>と</sup>め  
くれ盤<sup>は</sup>  
や万<sup>ま</sup>耳<sup>に</sup>盤<sup>は</sup>るも  
と万<sup>ま</sup>らさ利<sup>り</sup>遣<sup>り</sup>利<sup>り</sup>

杏花と云題を  
あふ可<sup>か</sup>らも<sup>と</sup>能<sup>の</sup>者<sup>な</sup>な  
本<sup>は</sup>こ曾<sup>そ</sup>可<sup>か</sup>奈<sup>な</sup>し遣<sup>け</sup>れ  
わ可<sup>か</sup>れむことを可<sup>か</sup>年<sup>ね</sup>  
ておもへ盤<sup>は</sup>

那<sup>な</sup>つよ八<sup>は</sup>万<sup>ま</sup>多<sup>た</sup>よひな  
可<sup>か</sup>らあけぬるをくも  
のいつこ耳<sup>に</sup>  
つ支<sup>ち</sup>可<sup>か</sup>くる  
らん

那<sup>な</sup>三<sup>み</sup>た可<sup>か</sup>九<sup>く</sup>もみち  
於<sup>お</sup>保<sup>ほ</sup>く曾<sup>そ</sup>な可<sup>か</sup>れける  
せ<sup>と</sup>うち者<sup>な</sup>らふ  
ひとしなけ  
禮<sup>れ</sup>盤<sup>は</sup>

布<sup>ふ</sup>ゆな可<sup>か</sup>ら曾<sup>そ</sup>らより花<sup>の</sup>ち

りくる八くものあ那  
た八ゝる耳やあるらん

う支身耳八遣ふりな□  
東もき可那くに曾てに可くるゝ  
ことのは可那さ

戀

む志のことこゑ二  
たてゝ者那可年と无  
な三堂のみこ曾した  
二な可る連

於もひけむひと曾と无  
耳おもはまし

万さしやむくいな可り  
希りや八

い万者ゝやこ悲し那  
ましをあひ三むと  
たのめしこ登曾  
いのち那利ける

の三も那支  
わ堂る可奈  
ひとをおもふこゝろ

者か可り二にあら年ねと無  
くもゐる二に

うら三かてもし本ほんの  
ひる万ま八や那なくさめつ  
たもと耳那な三み能の

いか可り耳み世せん

傳藤原行成筆 賀歌 五首 (五首一紙) 解題並釋文

解 題

この五首一紙は舊松浦伯の藏する所であつて、獨草體二首と連綿體三首とよりなつて皆賀之歌で料紙は雲紙の汚染のない古筆の墨寶である。その書風は御物朗詠集、伊豫切朗詠集、法輪寺切、高野切卷十八、九等と同一である。上代の假名の中でも字が大きいので珍らしい。形態も整ひ數ある上代假名の中で緩かで長閑な氣分が窺はれる。中にも「おほそらに」の一首は特に當時の大どかな氣分が多分に味ふことが出来る。そして上代假名を學ぶよき手本となり古筆の幅物としての逸品である。

尙此の一紙に折紙が添へてある。

右參議佐理卿眞蹟照々然更不涉異論者也。定爲稀有珍奇、雖憚恐眼、依

貴命不得固辭猥染禿毫以證之而已。

賈黃金五十枚

元祿十六年癸未仲冬下旬

神田道僖印

(佐理卿の眞蹟としては恐らくは誤りならん。寧ろ藤原行成卿の筆と傳ふるが温當ならんか。)

因に大口周魚によつて御物和漢朗詠集に慣つて行成の名を冠し「五首一紙」實は二紙であるとして呼ばれた。惜しいかな先年一首づつ分割され蓬萊切と名付けられた。

釋 文

お本そらにむれ多るたつ  
能さしな可らおもふこゝ  
ろのありけ那る可な

(拾遺和歌集卷第五賀の部にあり伊豫の作である)

めつらしきちよのね農  
日のためし爾は万つ  
遣ふをこそひくへ可り

个禮

(拾遺和歌集第五賀の部に見えてをり藤原信方の作である)

支み可よはあまのはころ  
もまれ爾きてなつと毛

つきぬい者本なるらむ

(拾遺和歌集卷第五賀の部に見えてをり讀人不知とあり)

よ露都餘耳閑波

良ぬ者奈乃伊呂難禮盤

移川麗濃安幾我起

身駕微差羅無

(拾遺和歌集卷第五賀の部に見えてをり小野宮太政大臣の作である)

於本波羅や越

志寶乃耶末濃故滿川

者羅半や許當閑麗

地與乃賀遣微む

(後撰和歌集卷第二十賀の部に見えて居り紀貫之の作である)



終

かな名蹟全集 第三

昭和十二年十二月廿一日印刷 (三冊)  
昭和十二年十二月廿五日發行 定價金貳圓參拾錢

編輯者	武田基一
代表者	武田基一
發行人	武田基一
印刷人	川秀藏

發行所 東京市下谷區中根岸町七二 武田墨彩堂  
電話 三三七番  
振替 東京六〇五四八番